
魔理沙の奇妙な弾幕 ブレイジング クルセイダーズ

文：DHMO 挿絵：各舞し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔理沙の奇妙な弾幕 ブレイジング クルセイダーズ

【NZコード】

N10007S

【作者名】

文：DHMO 挿絵：名舞し

【あらすじ】

八つ裂き鬼氏主催、SS鍋祭りの灰汁とも言えないもので御座います。

笑って読んで下さい！

(前書き)

作者DHMOと友人各舞し氏の助力の元完成しました！
眞面目に読まないで下さい！

かさかさとゴキブリの様に博麗神社の台所を漁る人影。服装からしてもまさしくゴキブリであるがそれはいいとして。その物音の発生源に博麗の巫女は素早く会心の一撃を繰り出し、ざざりと人影は倒れ込んだ。

「……喧しい」

スパコーンとやけにいい音を響かせた頭を抱えた白黒魔女とひしゃげたやかんを手に持つた紅白巫女が今日も平和に過ごして……平和？ うん、平和。

「何すんだ靈夢……あいたた」

「それは」口の台詞よ。人が昼夜してゐる時にガサガサゴソゴソ……つたぐ、目が覚めちゃつたじゃない

言い争いながら一人とも涙目で畳の間に行き、何時もの様にちやぶ台の上から茶菓子をつまもうとして紅白が気付いた。

「……私のお煎餅は？」

「お先に頂いひつてええ！」

再び凶器と化したやかんを振るう巫女の姿は正に般若か修羅かオーガの如くだったそうな。衛星から監視される巫女とか何それ怖い。

「……で、一体何の用?」

靈夢がやかんのスペシャルパワー『暴打フォン』を使い『ガラクタ』に変化させて漸くした後、ボロ雑巾になつた魔理沙に問い合わせた。

「その質問を待つてたけど、その前に怪我大丈夫? とか『ごめんね? とか謝罪の言葉位聞きたかったぜ』

「あんたにそんな事訊く位なら今から自販機の下の小銭探しでもした方がマシよ」

私への心配は小学生がりもしない財宝を探す時間よりも無駄か、とは口に出さない。それとも本当に家計が逼迫しているのだろうか。

「で、どうしたの?」

「暇なんだゾエ (キラッ)

「表に出る封印してやる

ど」「やの歌姫をマネた魔理沙に今度はやかんの代わりに陰陽玉を取り出し振りかぶる靈夢。使い方が確實に間違つてゐるであらうが当たればただでは済まない。

「[冗談冗談]……いやー、食料が無くなつてしまつたから少しこうだきに来たんだぜ」

その返答に靈夢は疑問符を浮かべた。魔法の研究に夢中になり買い溜めた食べ物を腐らせた魔理沙が食料を求めて里に這い出で来るのはよく見る光景であるが、博麗神社に糧食田口にてに来たのは初めてである。

……普段から近づいてはゐない、と思つただが。

「そんなの、つかも少ないのにあなたにやる分、…………」

みるみる顔を青くさせた靈夢は口所に文字通り飛んでこき、縄を裂いたよつた悲鳴を上げた。

遅れて魔理沙が立ち上がるうつむいたトールギスもびくづな速度で靈夢が掴み掛かる。

「あなた……冷蔵庫にあつた魚肉ソーセージ……あれビーフしたのよ…………」

「あ、あれか？ 一本しか無かつたからやつを食つた「死ねえ！」
どわあー！」

あつのおまかづき起じつた事を話したら掴みあげられたまま鳥居に

投げ飛ばされた。

「つおつ、ヒ、これなりなこすん「だまらつしゃこ」の泥棒猫!」
「へふあー? ? ?」

若干間違った意味で使われた言葉と共に放たれた陰陽玉は魔理沙の腹にクリーンヒットした。

♪ 20503 | 2809 ♪

「私の晩御飯を……折角拾つてきたものがあんたわああああ……」

「え、あれ拾いものかよ」

道理でやけに土臭いと想つたぜ、と口の中で呟きつつ立て掛けた簫に乗り靈夢の針をかわす。

「避けるな!」

「む、ちや、を、言ひなッ! 恋符『マスタースパーク』!」
ミニ八卦炉から放出されたビームを難無く受け止めた靈夢は皿のスペルカードを構える。

「ちょ、今当たつてただろ! なんで……」

「ひつそいわね、これ位出来なきや博麗の巫女なんてやつてらうな
いわよ。神靈『夢想封印』!」

またもや陰陽玉の強襲。今度はキッチンとグレイズするが、避けた先には既に靈夢が手を打っていた。

「ぐ、シ！？」

弱目の結界。だが避ける事で精一杯だった魔理沙の動きを止めるには十分な威力だ。

「かかつたな、アホがツ！ 稲妻十字空烈刃！」

手刀の一撃が入り筈から落ちた魔理沙に靈夢が追撃をかける。

最早スペルカードルールを無視して殴打を繰り返している。これにはスタンド使いも苦笑い。

魔理沙あああーーツ！君がツ！泣くまで！殴るのを止めないツ

明らかに、明らかに漫画を読んだ影響であらわし、夢の顔は心なしか

劇画調であった、と後に魔理沙が語っている。

やがて両者が地に落ち、土埃が晴れるとそこにはジョーモデル立ちをする靈夢と横たわっている……

「これは……ツ！？」

ボロボロになつていた紫であつた。その時、上方から膨大な魔力を感じて空を見上げると辛うじて、スキマに足を掛けた魔理沙がラストスペルを宣誓した姿が見えた。

「魔砲……ファイナルスパアアアアアクツツーー！」

数時間後、妹紅の屋台。

「まつさか……この私が偽者に気付かないなんてね……」

若干焦げたりボンを弄りながら靈夢が溜め息を吐く。その様子を見て隣に座つて魔理沙がバンバンと肩を叩いた。

「まーお前もふつーの人間だつたつて事だぜー もーー、皮とネギまだか？」

「ハイハイつと、お待ちどーさま

僅かな博麗神社の賽銭を握り締め魔理沙は喜んで奢られ、靈夢は覗き見していた紫を呪いながら奢らされていた。

「ハア……明日から慧音にでもお世話にならつかしら

「大丈夫、次は私が奢るぜ」

「嘘だ！ それは絶対嘘だ！」

……何だかんだ言つても、やはり平和に過ぐしているのであった。

「……紫様、何やつてんですか」

草木も眠る丑三つ時になり本堂の裏手に棄てられた紫は漸く式の藍によつて発見された。

「藍……私、今日から覗きは止める事にするわ……」

「はいはい、寝言は家か老人ホームか土に還つたら言つて下さいね

幻想郷のマーシーと名高い八雲紫が一瞬だけ真人間になつた瞬間であつた。つか妖怪だし。

(後書き)

……いやはや、自分が書くとネタが入るのは自明の理ですな。
クスリと笑つて頂ければ満足です。

読了感謝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1007s/>

魔理沙の奇妙な弾幕 ブレイジング クルセイダーズ

2011年5月21日09時08分発行